

紛争地理解と教育

アフリカ取材を通して学んだ、人間の光と闇

しもむらやすき
フリージャーナリスト 下村靖樹



1971年兵庫県生まれ。フリージャーナリスト。東京写真専門学校を卒業後、現在はサラリーマンを兼業しつつ世界に20万人いるといわれている子ども兵士問題を中心にアフリカの紛争地を取材している。

はじめに

写真専門学校を卒業した21歳の時、私は初めてアフリカ取材に赴きました。その後も、アルバイトをしながら年に一度の現地取材だけは続けていました。33歳の時、私の活動に理解を示してくれる会社に恵まれ、以来、年に11か月間は会社員として働き、残りの1か月、会社を休業させてもらいアフリカ取材を続けています。

ジャーナリストの道へ

小中高と朝から晩まで野球漬けの毎日で、自分の将来についてまったく考えたことがありませんでした。高校野球生活最後の試合が終わり、何の目的もなくダラダラと毎日を過ごしていたある日、テレビのニュースに映し出されたアフリカの難民キャンプの映像——舞い上がった埃で茶色く煙った難民キャンプの全景、そして青いビニールで作られたボロボロの家の前で涙ながらに惨状を訴える難民の女性——を見た瞬間、「ここに行つて、この人たちに会つてみたい」と、それまで海外にも難民問題にもまったく興味がなかったの

に、唐突にそんな思いが沸き起こりました。

翌日から、難民キャンプに行ける職業を探し始め、真剣に考えた結果、新聞記者になりたい、という結論に達しました。

しかし、残念なことに行くべき大学には、とても自分の成績で受かるころはなく……。紆余曲折を経て新聞記者をあきらめ、カメラの道に飛び込み、フリージャーナリストとして活動することになりました。

紛争地で残酷な状況におかれる命

紛争地では、多くの苛酷な状況を見聞きしてきました。

「友人と共に死ぬべきか、友人を殺し自分だけ生き残るべきか……」。1994年に起きた犠牲者100万人ともいわれるルワンダ大虐殺の最中、この難題を突きつけられたのは、12歳の少女でした。

少女は虐殺を行っていた側の民族でしたが、殺害対象の民族に属している友人を3人、自宅に匿っていました。しかし、虐殺を主導していた民兵たちに見つかつてしまいます。民兵が少女に要求したのは、「殺害対象を匿う」という

裏切り行為を行った少女に、自身の手で友人を殺し味方であることを証明させることでした。「もし友だちを殺せばお前だけは助けてやる。だが殺せないなら、友だちもお前も殺す。どちらを選んでも友だちは死ぬんだ。答えは簡単だろ?」。

この悪魔の二択に対し、彼女は、生き残ることを選択しました。

内戦終結から4年後の1998年。虐殺に荷担した罪で収監中の人々にインタビューさせてもらった際、少女自身の口からこの話を聞きました。「私がしたことは悪いことなの? 正解は何だったの? 教えてよ!」。インタビューの最後、16歳になった少女が投げかけてきた問いに、私は何も答えられませんでした。人間の闇が顕在化した、ルワンダ内戦。1万人を超える人々が虐殺された教会で目にした凄惨な光景と、少女の問いかけにいつか答えるため、ジャーナリストとして生きていく覚悟を決めました。

苛酷な状況から立ち直っていく子どもたち

他にも取材を通して様々な現場をカメラに



元子ども兵士
この笑顔が私を救ってくれた

収めるとともに、そこで生きる人々に話を聞かせてもらいました。目を覆う残酷な現場や言葉を失う苛酷な現実に耐えきれず、一時期、生きる希望を失いかけたこともありましたが、そんな私を救ってくれたのは、ウガンダで取材させてもらった元子ども兵士たちでした。

ウガンダの反政府組織「神の抵抗軍」に誘拐された子どもたちは、銃器を扱う訓練を受けた後、苛酷なゲリラ生活に放り込まれます。そこでは、子どもたちから思考力や逃亡する気力を奪うために体罰や性的暴行だけでなく、ありとあらゆる残酷な仕打ちが行われました。

帰る場所をなくすために、自分が住んでいた村を襲撃させ、親兄弟や知り合いを子ども自身の手で殺害させたり、協力して反乱を起こせないよう子どもたちをグループ分けし密告制度により相互監視を行わせたりし、子どもたちから自尊心と考える力を奪い感情をなくした機械のような兵士に仕立て上げるのです。

そのため、救出された直後の子どもたちは全員「死んだ魚のような目」という言葉を体現したような、視線の定まらない暗い目を虚空に彷徨わせていました。さらに取材を重ねると、元々は被害

者だったはずの子どもが長いゲリラ生活を経て、いつしか子どもを誘拐したり虐待したりする加害者となっているケースもあるとのこと。私はその負の連鎖に絶句し、自分の無力さに絶望しました。

しかしリハビリ中の子どもたちは取材に行く度に、「わざわざ遠いアフリカまで来てくれてありがとう！」と、出迎えてくれるのです。そしてリハビリ施設内には、障害が残ってしまった子どもたちの食事を手伝う元少年兵や死体の中から救出された赤ん坊をあやす元少女兵の姿――。

「僕の夢は、ここにいて仲間たちと会社を作ること。いっぱいお金を稼いで、いつかみんなで日本にも行きたいな」。曇りのない笑顔で夢を語ってくれた14歳の少年の頭には、仲間に密告されリンチを受けた際にできた山刀による深い傷跡が残っていました。

「姉は脱走しようとして、目の前でゲリラに射殺されたの。私も、自分が撃った銃弾で戦闘中に何人かの命を奪ったと思う……。思い出したくない過去が多すぎるけど、この子のために私は生きていくわ」。愛おしそうに孤児の赤ん坊を腕に抱いていた少女は、10歳で誘拐され、9年間ゲリラとして過ごしました。その間二度の出産を経験したものの、食糧難で母乳が出なくなり、2人とも餓死させてしまったそうです。

「心を失うほど辛い経験をして、これほどの優しさや温かさを取り戻せるのも人間」。

想像を絶する苦しみと絶望を乗り越え、天真爛漫な笑顔を取り戻した元子ども兵士たちが教えてくれた「人間の可能性」は、私にとって生涯の宝物です。

今の子どもたちへ託す願い

「子どもは未来の宝」。使い古された言葉ではありませんが、アフリカ取材を通して私がたどり着いた結論はこの言葉です。

周知の通り、インターネットなどのIT技術が発達した現代社会では、遙か彼方の国で発生した出来事を、世界中の人々が瞬時に知ることができます。一昔前と比較すると、情報という目に見えない世界からは国境が消え、手を伸ばせば一人一人がいつでも希望する情報にアクセスできる時代になりました。

その一方で玉石混淆の情報の中から、本当に大切な情報を得ることは至難の業です。やがて日本の子どもたちが大人になりより良い世界を作り出そうと考えた時、共に考え力を合わせるの、今この瞬間、戦争や飢餓、貧困で苦しんでいる国々の子どもたちです。

10年後20年後に出会う「未来の友人たち」が、今何を見て笑い、どんなことに苦しむ、なぜ涙を流しているのかを知ることが、とても重要なことだと思います。残念ながら世界には未だ多くの問題が山積みです。いつかみんなが笑顔で暮らせる世界を作るため、「未来の友人たちの今」に、子どもたちが思いを馳せてくれることを願います。